

## 要 約

- 平均尾叉長22.7~25.5mmのハマフエフキの種苗を319.2千尾生産した。
- 第1次生産回次は、エボ類症の発生により歩留まりは0.3%と低かったが、第2次生産回次は3.0~5.9%の歩留まりであった。1水槽当たり10万尾の生産ができた。
- 初期飼育の歩留まりはやや向上したが、まだ低い。初期飼育の歩留まり向上とエボ類症の予防と対策が今後の課題である。
- 中間育成は、名護市運天原、許田漁港、および国頭村辺土名漁港で行った。
- 中間育成の歩留まりは、各々37.8%、74.8%、56.9%であった。
- 運天原の歩留まりが低かったのは、沖出し時のサイホンの距離が長かったことによる酸欠による稚魚の活力低下と、台風によって生簀網が破損して魚が逃げたことによると考えられる。
- 陸上水槽を使用した育成方法は、成長が良好で安定した歩留まりが得られた。
- 平均尾叉長75~107mmの人工種苗を運天原、許田漁港および辺土名漁港の3ヶ所に計約101千尾放流した。
- 運天原では放流後に音響給餌による管理を試みた。
- 87年放流群の市場での混獲率は、名護で4.08%、国頭で0.36%、88年放流群は名護で0.67%、国頭で0.28%、89年放流群は名護で17.74%、国頭で14.76%、90年放流群は名護で2.91%であった。
- 89年放流群を例にして1991年12月末現在の累積水揚げ量と金額を推定したところ、羽地放流群で183.1kg、約22万円、国頭放流群で89.3kg、約11万円であった。重量効果率は、名護で0.193、国頭で0.242、金額効果率ではそれぞれ0.141と0.176であった。
- 調査対象海域の天然ハマフエフキの水揚げは、約8.6トン、15,370尾で、前年に比べて約1.4トン、4,029尾の増加であった。これは1990年級群が卓越群であることに起因している。
- 1991年の屋我地島東藻場へのハマフエフキ幼魚の着底のピークは6月中旬から7月中旬にみられた。
- 91年級群の加入水準は、90年級群と同レベルで、卓越群と考えられる。
- 海流ハガキの回収率は、5月分が9.2%、7月分が1.4%であった。5月は羽地内外海沿岸に多数漂着したが、7月は与論島や徳之島にのみ漂着した。